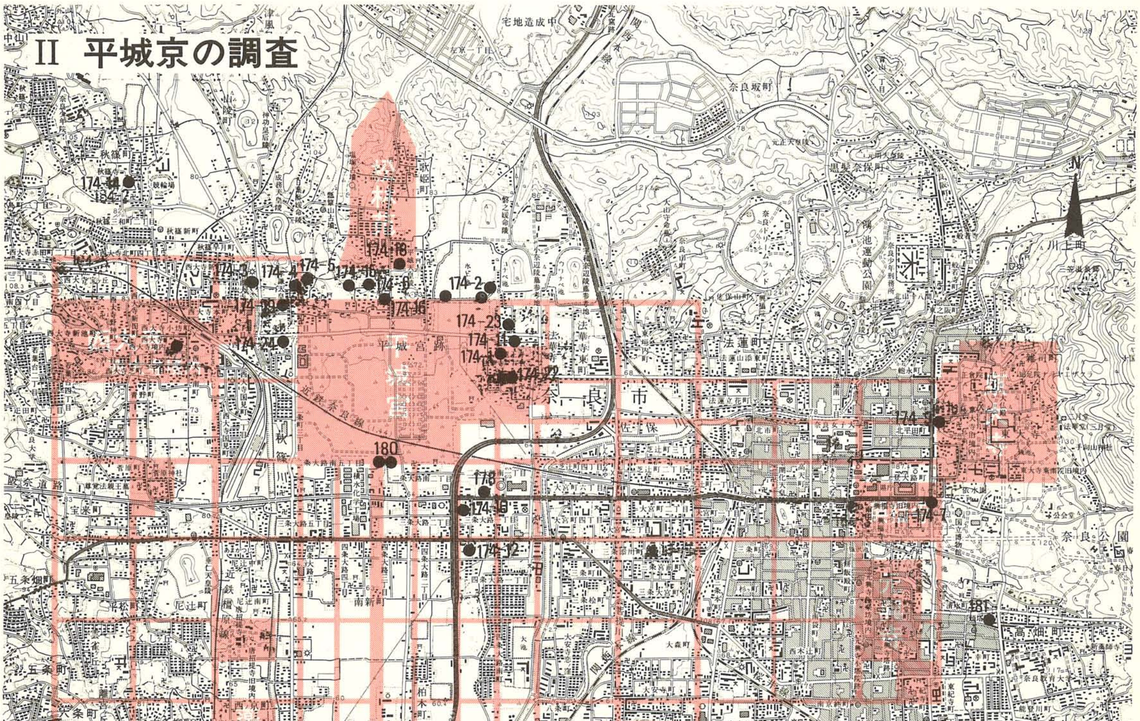
II 平城京の調査



第35図　昭和61年度平城京内発掘調査位置図

昭和61年度　平城京内発掘調査地一覧

調査次数	調査地		面積㎡	調査期間	備考	発掘担当者	掲載頁
174-1	法華寺旧境内	法華寺町 930・931	16	86. 4.18	塚本　宗敬	松村　恵司	82
※　3	右京一条北辺二坊	山陵町 110－2 他	34	5. 7	ヒラサワ	千田　剛道	
7	興福寺旧境内	登大路町48他	950	5.19～ 7.29	地下歩道	山岸　常人 上野　邦一	88
※　9	東大寺旧境内	押上町31－1	21	6.24～ 6.26	大谷　悦子	山岸　常人	
10	左京三条二坊三・四坪	二条大路一丁目 591－1，4	490	7. 7～ 7.25	扇谷　泰之	小林　謙一	58
11	左京一条二坊十四坪	法華寺町字北町村中 945	9.9	7.10～ 7.11	駿河　義一	巽　淳一郎	55
12	左京四条二坊一坪	四条大路一丁目 794	1,070	7.19～ 9. 6	永井　正雄	金子　裕之	72
13	薬師寺旧境内	西の京町 375－2	10	8. 7～ 8.12	白川　政公	小林　謙一	89
※　14	秋篠寺旧境内	秋篠町 758	7.5	9. 9	河辺　政子	上野　邦一	
※　19	右京一条二坊	佐紀町 21-1，2	5	12. 3～12. 5	大西　利明	井上　和人	
22	法華寺旧境内	法華寺町西浦田630－3	95	87. 1. 7～ 1.27	公民館	島田　敏男	83
※　23	〃	法華寺中町 633	4.6	1.30	本田　ヤエ	島田　敏男	
24	右京一条二坊三坪	二条町2－2－65－1	43.2	3. 2～ 3. 5	杉本喜久蔵	田辺　征夫	74
178	左京三条二坊七坪	二条大路南一丁目 111－1 他	6,900	86.9.30～87.4.24	そごう	井上　和人 岩永　省三	61
179	右京八条一坊十四坪	大和郡山市九条町 132 他	1,100	11. 7～12.26	焼却場	本中　真	75
180	左京三条一坊一・八坪	北新町(北新大池,小池)	150	87. 1.28～ 2.16		橋本　義則	56
181	頭塔	高畑町字頭塔 921	300	2. 2～ 4.17	奈良県整備	高瀬　要一	77
次数外	西大寺	西大寺芝町一丁目	456.7	86. 7.23～ 9.29	防　災	巽　淳一郎	90

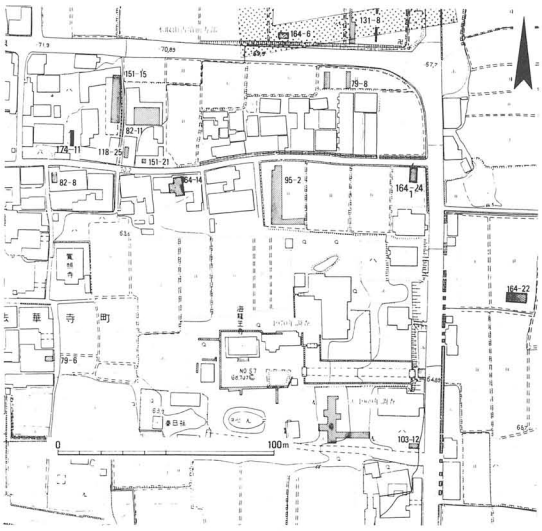
※は本文に収録せず。巻末「その他の発掘調査一覧」参照。

1　左京一条二坊十四坪の調査　　第174－11次

この調査は、住宅改築に伴なう事前調査として実施した。

調査地は、法華寺北方、通称一条通りから南に下る道路と一条通りと平行して走る東西道路の交差するすぐ東側の宅地である。

調査は、宅地東側の畑地に南北トレンチを設けて実施した。



第36図　左京一条二坊十四坪調査位置図

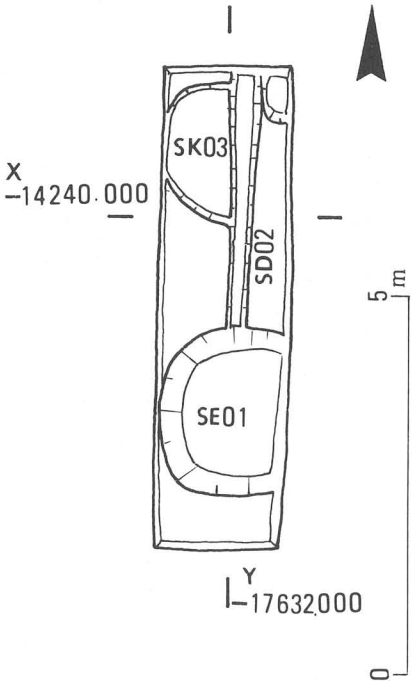
遺　構

現地表下約20～40cmで黄褐粘土の地山となり、この面で井戸SE01、南北溝SD02、土壙SK03を検出した。SE01は、径2.0m程の円形の掘形で、埋土から江戸時代の陶磁器片が少量出土した。深さは60cm以上あるが調査区の制約のため、底を確認するに至らなかった。SD02は、幅約30cm、深さ10cm程の細い溝で、SE01に切られる。SK03は、深さ10cm程の浅い土壙で、遺物は出土していない。

いずれも、中世以降の遺構であり、奈良時代の当坪に関連する遺構は検出していない。

遺　物

出土遺物は少なく、井戸SE01から江戸時代の陶磁器片、地山面直上から15世紀頃の青磁碗の小片が出土しているに過ぎない。

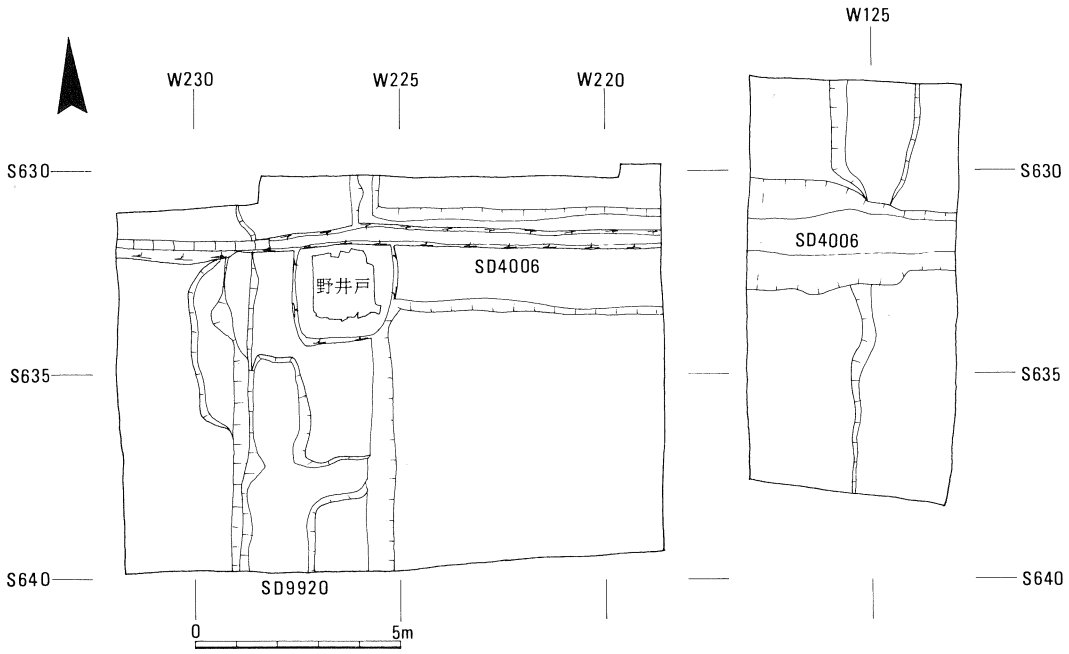


第37図　左京一条二坊十四坪発掘遺構図

2　左京三条一坊一・八坪の調査　　第180次

本調査は、当研究所と奈良市がそれぞれ平城宮跡に南接する北新大池の北半分および北新小池を埋め立てて、二条大路と朱雀大路を復原整備するのにともなう事前調査である。本調査の目的は、二条大路南側溝と朱雀大路東側溝の位置とその残存状況、および左京三条一坊一・八坪の西北隅の状況を確認することにおいた。これまで、二条大路南側溝は、第32次・第118―22次・第122次・第133次・第155次・第167次の各調査で検出しており、また朱雀大路東側溝については、第130次調査で二条大路北側溝との合流点を確認している。今回の調査では、従来の知見に基づき、二条大路南側溝と朱雀大路東側溝の存在が推定される北新大池の池底と北新小池の岸沿いに、二か所の発掘区（東区と西区）を設けて行った。

東区　北新大池の西岸沿いの池底部に、東西約５ｍ、南北約10ｍの発掘区を設けた。大池の池底下約20cmで二条大路南側溝SD4006を検出した。SD4006は、幅

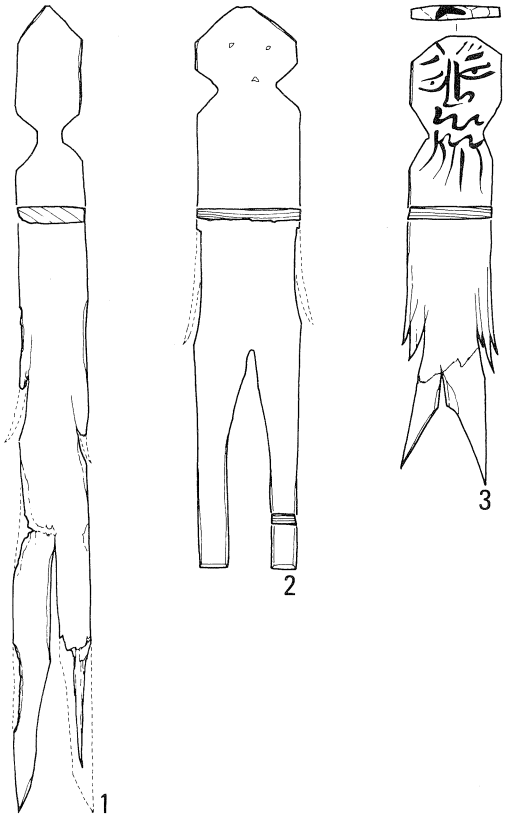


第38図　左京三条一坊一・八坪発掘遺構図

約4.5m、深さ約90cmの素掘りの東西溝で、溝内の堆積は大きく上下二層にわけられる。下層には比較的多量の平瓦・丸瓦の破片が落ち込んでいたが、上層には全く遺物が含まれていなかった。なお溝の南側は後世の削平をうけており、左京三条一坊八坪北辺を限る築地塀の痕跡は確認できなかった。

西区　北新小池の東堤に沿って、東西約13m、南北約９mの発掘区を設けた。現地表下約50cmで朱雀大路東側溝SD9920と二条大路南側溝SD4006の二条の溝を検出した。SD9920は、幅約3.8m、深さ約60cmの素掘りの南北溝で、溝底は部分的に深くえぐられているがほぼ平坦である。溝内の堆積はおおむね上下二層にわかれるが、二層とも遺物をあまり含んでいない。二条大路南側溝との合流点の下層の堆積から３点の人形（第39図）のほかに比較的多量の木屑が出土した以外は、少量の須恵器・土師器・瓦片と藤原宮式の軒平瓦（6642-B）１点が出土したに過ぎない。SD4006は、幅約3.3m、深さ約40cmの素掘りの東西溝で、溝の底は平坦になっている。溝内の堆積は東区同様に上下二層に分かれ、判読できない木簡２点が出土したほかは、遺物の量はきわめて少ない。なお左京三条一坊一坪の西面および北面を限る築地塀の痕跡は確認できなかった。

以上、今回の調査の成果をまとめると、二条大路南側溝と朱雀大路東側溝を東区・西区両発掘区で推定位置に検出することができたが、左京三条一坊一坪の西辺・北辺および八坪北辺を限る築地塀を確認することはできなかった。



第39図　SD9920出土人形（１：２）

3　左京三条二坊三・四坪の調査　　第174―10次

この調査は店舗建設に伴なう事前調査である。調査地は、国道368号線（大宮通り）の南約150m、国道24号線バイパスの東に接しており、平城京左京三条二坊四坪の西北部分にあたる。

調査地は、全体に厚さ0.8～0.9mの盛土（現代）があり、その下は、水田耕土、床土、灰色ないし暗褐色の砂質土、黄褐色粘質土の順となる。遺構面は、砂質土の上面であるが、調査区の西南部では、炭化物を含む灰色粘質土の遺物包含層がひろがる。

遺　構

調査の結果、掘立柱建物７棟、掘立柱塀７条、井戸１基、三・四坪の坪境小路とその南北両側溝のほか、多数の土壙、溝などを検出した。

これらの遺構は、遺物や、遺構の状況からＡ～Ｄの４期に区分できる。

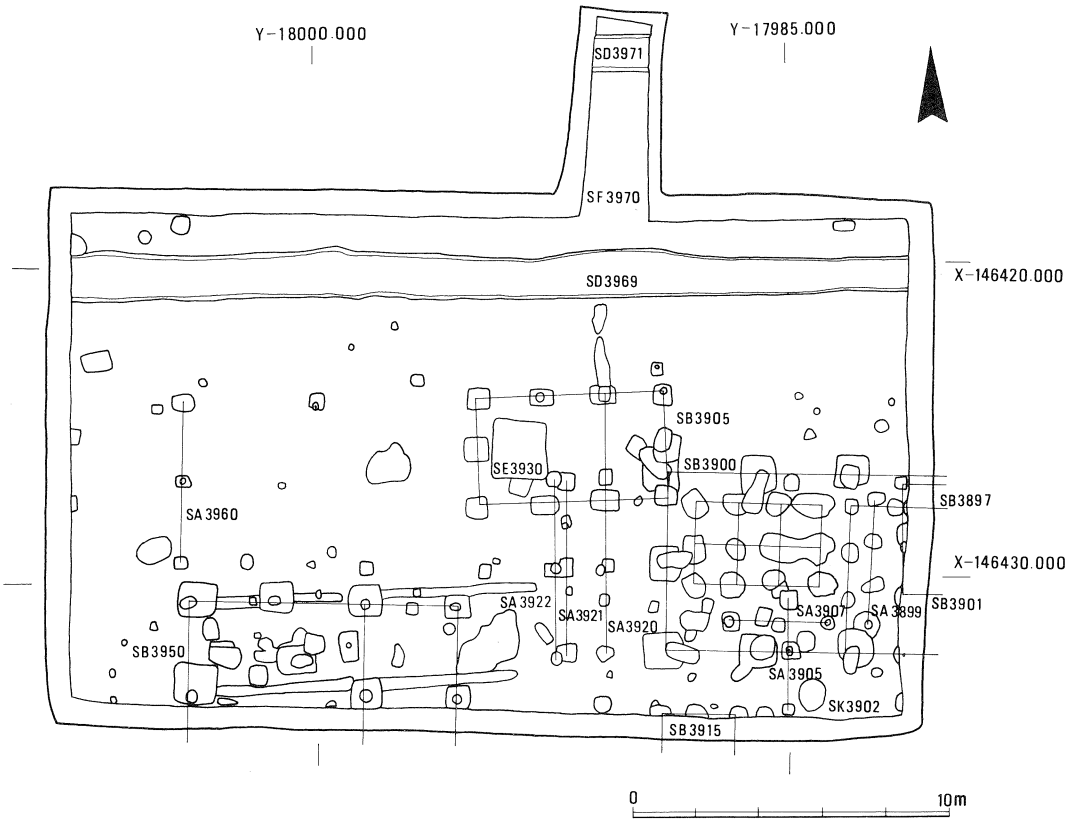
Ａ期　調査区の東南部で検出した掘立柱建物３棟、掘立柱塀１条がこの時期に属する。SB3910は、２間×３間、総柱で倉庫風の東西棟、柱間は1.35m（4.5尺）等間で、柱はすべて抜き取られている。東に接するSB3897は、２間×３間の南北棟。北妻の柱筋がSB3910の北側柱と揃う。東側柱は発掘区の外になるが、柱間は、梁行1.85m（6.2尺）、桁行1.55m（5.2尺）である。SB3915は、1.2ｍ（４尺）間隔で東西にならぶ柱掘形を検出したのみであるが、南北棟の北妻部分とみられる。SA3907は２間の東西棟で、柱間は、1.55m（5.2尺）である。以上の遺構は方位を揃え、北で東に振れる。SB3910の東南隅柱の抜き取り穴から奈良時代中頃の土器が出土している。また、SB3897の西南にある土壙SK3902からも奈良時代中頃の土器が出土した。Ａ期の遺構の廃絶に伴なうものであろうか。

Ｂ期　この時期には、掘立柱建物２棟と井戸１基がある。SB3900は東西棟建物の一部で、梁行２間桁行２間以上である。柱はすべて抜き取られている。SB3950は、東に廂がつく南北棟建物で、柱の抜き取り痕跡がある。柱間寸法は、い

ずれの建物も梁行2.8m（9.5尺）、桁行2.95m（10尺）である。SB3950の廂の出は2.95m（10尺）である。建物方位は北で少し東に振れる。SE3930は、井戸枠が完全に抜き取られている。柱抜き取り穴や井戸からは、奈良時代中頃から後半にかけての遺物が出土している。

C期　調査区中央の東西棟建物SB3925の1棟のみがある。2間×3間で、柱間は梁行1.7m（5.8尺）、桁行2.0m（6.8尺）である。建物方位は、他の建物と異なり北で西に振れる。東妻柱と東南隅柱の掘形がSB3900の西北隅柱の掘形を破壊しており、奈良時代末以降と推定される。

D期　掘立柱建物1棟と掘立柱塀4条がこの時期に属す。SB3901は、調査区の東に続く東西棟の一部と考えられる。柱間は1.8m（6尺）。SA3905は南北塀で2間分を検出。柱間は1.9m（6.5尺）。SA3920は3間分を検出した南北塀。



第40図　左京三条二坊三・四坪発掘遺構図

柱間は2.8m（9.5尺）で、北端の柱掘形がSB3925の柱掘形と重複する。SA3921、SA3922は南北塀で、それぞれ2間分を検出。柱間はSA3921が2.65m（9尺）、SA3922が2.8m（9.5尺）である。SA3921を廃してSA3922としている。これらの遺構の方位は、ほとんど振れを示さない。

条坊関係の遺構　SF3970は三・四坪の坪境小路。SD3969、SD3971は小路の南北の側溝。SD3969は幅1.55～1.9m、深さ40cm前後、SD3971は幅1.45m、深さ25cmほど残っている。両側溝の心心距離は7m強で、令の20大尺（＝24小尺）にほぼ相当する。現状での小路の路面幅は約5.5mとなる。なお小路心の座標値は、X＝－146416.877、Y＝－17991.400である。

その他の遺構　SA3899はA期の遺構よりさらに北で東に振れる3間の南北棟。柱間は、1.35m（4.5尺）。SA3960は、2間の南北塀で柱間は2.55m（8.7尺）。B期の建物とほぼ同じ方位を示す。

遺　　物

包含層、土壙、柱掘形などから、主として奈良時代中頃から後半にかけての土器が出土している。瓦類は、それほど多くなく、軒瓦として軒丸瓦6311B型式が1点、軒平瓦6721C型式が2点出土しているのみである。また、井戸SE3930からは、木簡1点が出土している。釈文は「小□郷弟国□」である。

まとめ

四坪の西北部分のさらに東北部にあたる本調査地は、坪の東西中軸線の推定位置のすぐ西になる。SB3897・SB3900は、いずれも坪の東西中軸線上に建つものであり、この坪が奈良時代には細分されていなかった可能性が考えられる。ただ、前半には、倉庫などの雑舎的な建物が並んでいるのに対して、後半になると、大きな建物が整然と配置された様子がうかがえる。しかし、坪のなかでの位置や廂を持たないことなどから、SB3900を正殿とはしがたい。むしろ、SB3900を後殿と考え、その南方に正殿が想定されよう。

4　左京三条二坊七坪の調査　　第178次

デパート建設にともなう事前調査である。デパートの敷地は、東を菰川（こもがわ）、南を大宮通り、西を国道24号線、北を近鉄線路で画された面積約40000㎡の場所で、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪にあたる。このうち約30000㎡を2年半の期間で発掘調査する予定で1986年9月30日から実施している。今回の調査区は敷地南端の東西約140m、南北約50m、面積約6900㎡の範囲で、七坪の南半分にあたる。調査は現在最終段階に達しているが、継続中である。本稿は4月末までに得た所見にもとづき執筆した。

調査地周辺は、近年急激に市街地化している地域である。こうした開発にともなう発掘調査の増加により、左京三条二坊は平城京内で発掘調査がもっとも多く行なわれた地区となっている。これまでの調査成果によれば、左京三条二坊には、上級官人に班給された一町以上を占める宅地が、三・六・九・十五坪にある。こうした大規模な宅地が多く見られること、平城宮の東南に接する通勤に便利な位置にあること、などから左京三条二坊は平城京内でも一等地の高級邸宅街であったと考えられる。今回調査した七坪の周辺でも、西隣りの二坪で大規模な建物が（第118－15次）、南隣りの六坪では平城宮と密接な関係をもつ公的宴遊施設が見つかっており、七坪の利用状況が注目された。

遺構の概要

調査区の基本的層序は、1mを越す盛土下に、上から水田耕土（約20cm）、床土（約10～30cm）、遺物包含層（暗灰褐粘質土、約5～30cm）が堆積し、遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。この面は、調査区の東⅓と西⅔とで情況が異なっている。西方は全体に奈良時代の整地層（灰黄粘質土、約10～25cm）があり、その下が地山（調査区西端部のみ黄白砂質土、それ以東は黄灰粘質土）である。東方は整地層がなく、遺物包含層の直下が地山（黄灰粘質土ないし黄灰白砂質土）である。地山面には平城京造営以前の河川が縦横に流れ、粘質

土と砂質土が細かく入れ変る複雑な様相を呈している。

検出した遺構は、掘立柱建物50棟以上、掘立柱塀39条以上、溝10条以上、井戸14基、坪境の道路1条、坊間路1条、坪内道路2条、旧河川数条などである。これらは、平城京造営以前（A期）と奈良時代以降（B期～）に大別される。後者はさらに、重複関係・配置などから7期に区分できる。以下の記述では、各時期について、遺構の配置を概観してから、個々の遺構を説明する。

A期　調査区東半部に自然の河川が数条ある。図示したものが最大で、菰川の旧河川にあたる。蛇行しながら北東から南西へ流れ六坪へ続く。幅約4～12m、深さ約1.5mで、堆積層の砂礫層から5世紀中頃～8世紀初頭の土器が出土した。奈良時代当初には、自然堆積により深さ約50cmになっていた。

B期　七坪と西隣りの二坪との坪境小路がなく、両坪が一体として使われた。七坪の西半部から二坪にかけて、掘立柱塀で囲まれた区画があり、その中に規模の大きな中心的建物群がある。七坪の東半部は空閑地が多く、菰川の旧河川を掘り直した河川がある。B期はさらにB_1～B_3の3小期に区分できる。

B_1期　二坪と七坪の境界のやや西側に大規模な掘立柱建物SB100があり、掘立柱塀SA50・95がこれをとり囲む。SB100とSA50のほぼ中間に掘立柱塀SA70があり、この塀の東側に掘立柱建物SB56・62がある。SB100の妻には逆L字形に掘立柱塀SA97が取り付く。SA95の内側には、両側溝をもつ道路SF77があり、SA50の外側には掘立柱建物SB45がある。

SB100は、身舎梁行2間の東西棟で南北二面に廂をもつ。柱間は身舎・廂ともに3m（10尺）等間である。SA95は東西塀で14間分を検出し、さらに西へ延びる。柱間は、東側7間分が5.3m（18尺）等間、西側7間分が2.6m（9尺）等間である。SA50は南北塀で17間分を検出し、さらに北へ延びる。柱間は2.6m（9尺）等間である。SA97はSB100の東妻に取り付く逆L字形の塀で、東西方向が1間分、南北方向が2間分あり、SA95との間が8m（27尺）あいて通路となっている。柱間は東西方向が2.6m（9尺）、南北方向が5.2m（18尺）等間である。SA70は南北塀で4間分あり、SA95との間が5.4m（18尺）あいて通路となって

いる。柱間は5.3m（18尺）等間である。SF77は東西道路で、南北に側溝をもつ。長さ17m分を検出したが、本来はさらに東西に延びていたと考えられる。路幅は側溝心々で2.9～3.5m（10～12尺）あり、路心はSA95の北3.1～3.5m（10.5～12尺）にある。側溝は幅0.6～1.2m、深さ30cmである。SA102はSB100の北11m（37尺）にある東西塀で4間分あり、柱間は2.3m（8尺）等間である。西端がSB100の東妻柱筋と揃う。SB56は4間×2間の東西棟で、柱間は2.9m（10尺）等間である。南側柱がSA95の北5.9m（20尺）の位置にある。SB62は2間×2間の東西棟で、柱間は桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.1m（7尺）等間である。SA50とSA70の北延長部との中間に位置し、SB56と東妻柱筋を揃えている。SB45は3間×3間の東西棟総柱建物で、柱間は桁行2.5m（8尺）等間、梁行1.7m（6尺）等間である。

SD14は菰川旧河川の堆積層を穿って幅狭く造成した流路である。旧河川が深さ50cmほどになった時点でその底を掘り直したもので、旧河川の肩はそのまま生きた状態で存続している。後述のB3期ないしC期の廃絶時には、茶褐色粘質土で旧河川の肩まで一気に埋め立てられる。幅は3～7m、深さは流路自体では45cm、旧河川の肩からは90cmである。堆積土から8世紀前半の土器や木簡が出土した。SD22はSD14に流れ込む斜行溝で、幅50cm、深さ40cmである。SD106は東二坊坊間路西側溝で、平安時代初頭まで存続していた。幅3m、深さ1.2mである。堆積土は大きく3層に分れ、遺物は主として下層から出土した。遺物には、土器・木製品・墨書土器・木簡・和同開珎などがある。

B2期　SB100は存続するが、その東側の建物や塀が撤去され造り替えられる。SA70の位置を踏襲して掘立柱塀SA71が、SA95の位置の少し南に掘立柱塀SA38が、SA50の位置の東11.5mに掘立柱塀SA39がある。これら3条の塀で囲まれた区画の中に掘立柱建物SB40・60があり、SB40にはSA39が取り付く。このほか、SB100とSA71の中間には小規模な掘立柱建物SB86、SB40の東側には掘立柱建物SB25がある。流路SD14は存続している。

SA71は南北塀で15間分を検出し、さらに北へ延びる。柱間は2.9m（10尺）等

間である。SA38は東西塀で13間分あり、柱間は2.9m（10尺）等間である。SA39は南北塀で11間分あり、SB40の東妻柱に取り付く。柱間は2.9m（10尺）等間である。SB40は3間×2間の東西棟、SB60は7間×2間の東西棟で、両者が柱筋を揃えて東西に並ぶ。柱間は両者ともに桁行2.9m（10尺）等間、梁行2.8m（9.5尺）等間である。SB60とSA71の間が2.9m（10尺）、SB60とSB40の間が5.8m（20尺）あいている。SB86はSB100とSA71のほぼ中央にある3間×2間の東西棟で、柱間は桁行1.8m（6尺）等間、梁行1.5m（5尺）等間である。SB25はSA39の東19.5m（66尺）にある3間×2間の南北棟で、柱間は2.1m（7尺）等間である。北妻柱筋がSB40の北側柱筋と揃う。

B3期　B2期の建物や塀がすべて撤去され、掘立柱塀SA34・35で囲まれた大きな区画が作られる。この区画は掘立柱塀SA101で東西に2分され、東区画内には掘立柱建物SB63・90や掘立柱塀SA91がある。SA34をはさんでSB90の南側には小さな掘立柱建物SB85と掘立柱塀SA99がある。SA35の東側には掘立柱建物SB26があり、これの南方に掘立柱建物SB21がある。流路SD14の埋め立てが当期まで遡る可能性がある。

SA34は東西塀で28間分を検出し、さらに西へ延びる。柱間は2.65m（9尺）等間である。SA35は南北塀で6間分を検出し、さらに北へ延びる。柱間は2.7m（9尺）等間である。SA35は条坊計画による坪の南北中軸線上に位置し、SA34は条坊計画による坪の東西中軸線の南約10m（34尺）にある。SA34・35ともに改修がおこなわれており、SA34A・35Aの柱を抜き取った後に、同位置にSA34B・35Bの柱掘形を掘り直し柱を立てている。SA101は南北塀で、6間分を検出しさらに北へ延びる。柱間は南端の1間のみ2.4m（8尺）で、他は2.65m（9尺）等間である。SA34の東から26間目に取り付くが、この位置は条坊計画による二坪・七坪の境界線上にある。SB90は身舎が4間×2間の東西棟で、南北に廂をもち身舎は床張りである。柱間は桁行2.3m（7.5尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間で、廂の出は南が2.5m（8.5尺）、北が1.5m（5尺）である。SA91は南北塀で2間分ある。SB92の南廂の東2.7m（9尺）にあり、柱間は2.5m

（8.5尺）等間である。SB63は３間×２間の東西棟で、柱間は桁行2.1m（７尺）等間、梁行1.75m（６尺）等間である。北側柱筋がSB90の棟通と揃う。SB85は３間×２間の東西棟で、北側柱がSA34の南5.9m（20尺）にある。柱間は桁行1.7m（６尺）等間、梁行1.8m（６尺）等間である。SA99は東西塀で３間分あり、柱間は2.4m（８尺）等間である。SB85の北側柱筋の西延長上にあり、SB85の西妻との間が3.9m（13尺）あいている。

SB26は７間×２間の南北棟（桁行規模は第103－１次調査で確認）で、柱間は桁行３m（10尺）等間、梁行3.3m（11尺）等間である。西側柱がSA35の東9.3m（31尺）にある。SB21は５間×２間の南北棟で、柱間は桁行2.3m（８尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間である。北妻がSB26の南妻の南15m（50尺）にあり、SB26と棟通り筋を揃えている。

C期　七坪と二坪の境に南北方向の道路SF117Aが設けられ、七坪と二坪とが区画される。七坪内には東西方向の道路SF87が通り、坪が南北に二分される。七坪の北半区画には掘立柱建物SB65があり、区画の西南隅にはSF117A東側溝とSF87北側溝に沿ったL字形の溝SD104・105がある。七坪の南半区画には、掘立柱建物SB01・42・55・81・84がある。流路SD14は当期には埋められていた。

SF117Aは南北道路で、東西に側溝をもつ。長さ48m分を検出し、さらに南北に延びる。路幅は側溝心々で7.5m（25尺）である。西側溝は幅1.7～2.3m、深さ40cmで、調査区の北から南まで通る。東側溝は幅1.7m、深さ40cmで、現状では２ケ所で途切れている。この途切れが本来のものであるのか、後世の削平の結果であるのかについては、本調査区北側の調査の後に再度検討したい。SF87は東西道路で、南北に側溝をもつ。路幅は側溝心々で2.4m（８尺）である。側溝は後世の削平のために断続的にしか残っていない。北側溝はSF117A東側溝とつながり、幅が0.6～１m、南側溝は幅30cmである。SF87の路心は、条坊計画による坪の東西中心線の南約13.2m（45尺）にある。SD104は南北溝で、長さ12m分を検出し、さらに北へ延びる。SF117A東側溝の東４m（13尺）にあり、幅

1m深さ35cmである。SD105は東西溝で、長さ12m、幅1.8mである。SD87北側溝の北3.9m（13尺）にあり、西端でSD104とつながる。SD104・105とSF117A東側溝・SF87北側溝との間は幅2.4m（8尺）の帯状空閑地となるが、築地塀などの施設が設けられていた痕跡はない。

SB65は北半区画の中心的建物である。身舎梁行2間の南北棟で東西に廂をもつ。柱間は、桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.1m（9尺）等間、廂の出は2.7m（9尺）である。南妻がSF87北側溝の北12m（40尺）にある。SB55は南半区画の中心的建物である。身舎5間×2間の東西棟で、南北に廂をもつ。柱間、桁行2.9m（10尺）等間、梁行3m（10尺）等間、廂の出は3m（10尺）である。SB42は5間×2間の南北棟で、南妻柱筋がSB55の北側柱筋と揃う。柱間は、桁行の北端1間が3m（10尺）で、南4間が1.6m（5.5尺）等間、梁行1.8m（6尺）等間である。西側柱がSB55東妻の東7.3m（25尺）にある。SB81・84は南半区画北西隅にある小規模な雑舎的建物である。SB81は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行1.7m（6尺）等間、梁行2.5m（8.5尺）等間である。SB84は3間×2間の南北棟で、柱間は桁行1.7m（6尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間である。SB01は5間×2間の東西棟で、柱間は桁行2m（7尺）等間、梁行2.4m（8尺）等間である。

D期　SF117Aが廃され、再び二坪と坪が一体となる。条坊計画による二坪と七坪の境界線上に掘立柱建物SB96、七坪の南北四等分線上には掘立柱建物SB58・59が南北に並び、七坪の南北中軸線をはさんで掘立柱建物SB20・41が東西に並ぶ。小規模な雑舎的建物として、SB05・06・10・88・93がある。

SB96は身舎梁行2間・桁行4間以上の南北棟で、東西に廂をもつ。柱間は桁行2.6m（9尺）等間、梁行2.4m（8尺）等間、廂の出は2.6m（9尺）である。棟通りがほぼ条坊計画による二坪・七坪の境界線上にある。SB58は身舎4間×2間の東西棟で、南北に廂をもち、身舎は床張りである。柱間・廂の出ともに2.35m（8尺）である。SB59はSB58と柱筋を揃える4間×2間の東西棟で、梁行柱間が2m（7尺）等間である。SB58・59の桁行中心線は、条坊計画による七

坪の南北四等分線上にある。また、SB59の南側柱筋とSB58の棟通りは、条坊計画による七坪の東西中心線から、それぞれ9m（30尺）南と18m（30尺）南にある。SB20は身舎7間×2間の南北棟で、東西に廂をもつ。柱間は桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.3m（8尺）等間、廂の出は2.7m（9尺）である。SB41はSB20と柱筋を揃える7間×2間の南北棟で、梁行柱間が2.1m（7尺）等間である。西側柱列がSB58東妻の東14.7m（50尺）にあり、東側柱列がSB20西側柱列の西11.9m（40尺）にある。

SB88は3間×2間の東西棟で、柱間が桁行1.6m（5.5尺）等間、梁行は1.9m（6.5尺）等間である。南側柱筋がSB59の棟通りとほぼ揃う。SB93は3間×2間の南北棟で、柱間は桁行2m（7尺）等間、梁行2.25～2.35mである。SB05は3間以上×2間の東西棟、SB06は3間×3間の南北棟、SB10は2間×2間の南北棟で、いずれも柱間は1.8m～2.1m（6～7尺）である。SB05とSB06は東端が揃い、SB06の北妻はSB20の北妻とほぼ柱筋が揃う。

E期　再び七坪と二坪の境に南北道路SF117Bが設けられ、七坪と二坪が区画される。小規模な建物がSF117Bや坊間路沿いに散在し、坪の中央部にはほとんど建物がない。七坪内をさらに細分する施設は検出されていないが、浅い溝や生垣が存在した可能性がある。E期はE_1・E_2の2小期に区分できる。

E_1期　SF117B沿いに掘立柱建物SB80・83・89が南北に並び、坊間路沿いには掘立柱建物SB09・11、坪の中程には掘立柱建物SB32・53・66がある。

SF117Bの位置・規模はSF117Aと同じである。東西に側溝をもち、両側溝ともに調査区の北から南まで通る。東側溝は幅1.1～1.3m、深さ10cmで、西側溝は幅2～2.2m、深さ20cmである。SB80は身舎3間×2間の東西棟で、南を除く三面に廂をもつ。柱間は桁行2.1m（7尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間で、廂の出は東面・北面が2.1m（7尺）、西面が2.7m（9尺）である。SB83はSB80と柱筋を揃える3間×2間の東西棟で、梁行柱間が1.9～2.1m（6.5～7尺）である。SB89はSB80・83に柱筋を揃える3間×2間の東西棟で、南に廂をもつ。梁行柱間が1.6～1.75m（5.5～6尺）、廂の出が1.5～1.95m（5～6.5尺）

である。SB53は３間×２間の東西棟で、柱間は桁行2.1m（７尺）等間、梁行1.8m（６尺）等間である。SB32は３間×２間の東西棟で、柱間は桁行1.8m（６尺）等間、梁行1.75m（６尺）等間である。SB66は２間×２間以上の建物で、柱間は1.95m（6.5尺）である。

SD07はSD106の西９m（30尺）にある南北溝で、32m分検出し、さらに南北に続くと思われる。幅は最大1.2mである。SB09は３間×２間の東西棟で、柱間は1.5～2.8m（５～9.5尺）と不揃いである。SB11は３間×２間の南北棟で、柱間は桁行1.6～1.7m（5.5尺）、梁行2.1m（７尺）等間である。

E_2 期　SF117B沿いに掘立柱建物SB82・92、坊間路沿いに掘立柱建物SB04・08・13や掘立柱塀SA12、坪の中程に掘立柱建物SB43・64がある。

SB82は身舎４間×２間の東西棟で南に廂をもつ。柱間・廂の出とも2.7m（９尺）である。SB92は４間×２間の東西棟総柱建物で、柱間は桁行が２～2.4m（７～８尺）、梁行が1.3～2.2m（4.5～7.5尺）と不揃いである。SB43は３間×２間の東西棟、SB64は２間×２間の東西棟、SB04は２間×３間以上の東西棟、SB08は３間×２間の南北棟で東廂をもち、SB13は２間×２間以上の建物である。これらはいずれも柱間1.5～2.4m（５～８尺）程度の小規模な建物である。

井戸　井戸は14基あるが、これらの掘削時期・廃絶時期は目下検討中であるので、ここに一括して記述する。記述は東から西へ順におこなう。

SE02は、径2.7m、深さ1.5m以上の円形掘形内に設けた一辺97cmの方形縦板組の井戸。枠は隅柱を横桟でつなぎ、桟外に縦板を交互に重ねあわせたもの。

SE03は、径1.8m、深さ2.4m以上の円形掘形をもつ。井戸枠は遺存しない。

SE16は、径3.9m、深さ２mの円形掘形をもつ。井戸枠は抜き取られ遺存しない。抜き取り痕跡から平城宮土器Ⅴの土器が出土し、廃絶は奈良時代末である。

SE17は、径1.7m、深さ2.3mの円形掘形をもつ。埋土が上から下までほとんど一様であり、掘削を途中でやめて一気に埋めもどした可能性がある。

SE15は、径2.5m、深さ1.4mの円形掘形をもつ。一回改修されており、改修後の枠は一辺64cmの方形縦板組で隅柱がある。廃絶は奈良時代末である。

SE36は、径2.7m、深さ1.4mの円形掘形をもつ。一回改修されており、改修後の枠は一辺76cmの方形縦板組である。改修前の掘形がSB40を切り、掘削の上限はB_3期である。改修後の枠の据付け掘形から平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SE112は、径2.3m、深さ1.6mの円形掘形をもつ。井戸枠は遺存しない。掘形がS40の西妻中央柱を切り、掘削の上限はB_3期である。

SE113は、径1.6×2.1m、深さ1.3mの楕円形掘形をもつ。井戸枠は抜取られ遺存しない。掘形がSA50に切られ、掘削がB_1期以前に遡る。

SE78は、一辺90cm、深さ1.3mの方形掘形内に設けた一辺60cmの方形縦板組の井戸。隅柱を用いず、各辺に縦板を3～5枚並べている。

SE67は、径1.3m、深さ1mの円形掘形内に、底板をぬいた円形曲物を据えて枠とする。曲物は2段遺存し、下段が径58cmで高さ46cm、上段が径65cmで高さ46cm以上である。掘形がSA34を切り、SB59に切られているので、掘削はC期である。枠内の埋土から平城宮土器Ⅳの土器が出土した。

SE72は、径2.8×2.9m、深さ2.1mの隅丸方形掘形内に設けた一辺125cmの横板蒸籠組の井戸。横板は8段遺存する。掘形がSB60を切り、掘削の上限はB_3期である。枠内の埋土から平城宮土器Ⅳの土器が出土した。

SE115は、径2.6m、深さ1.3mの円形掘形をもつ。埋土が上から下までほとんど一様であり、掘削を途中でやめて一気に埋めもどした可能性がある。SB60・SA71を切り、掘削の上限はB_3期である。

SE79は、径1.8×2.1m、深さ1.2mの円形掘形内に、底板をぬいた円形曲物を据えて枠とする。曲物は2段遺存し、下段が径64cmで高さ47cm、上段が径75cmで高さ50cm以上である。掘形がSF77北側溝を切り、掘削の上限がB_1期である。枠内の埋土から平城宮土器Ⅴの土器が出土し、廃絶は奈良時代末である。

SE116は、径1.2m、深さ1.4mの円形掘形内に、底板をぬいた円形曲物を据えて枠とする。曲物は3段遺存し、下段が径47cmで高さ56cm、中段が径46cmで高さ28cm、上段が径48cmで高さ27cm以上である。中・上段の外側にはさらに径54cm、高さ46cmの曲物を置いている。

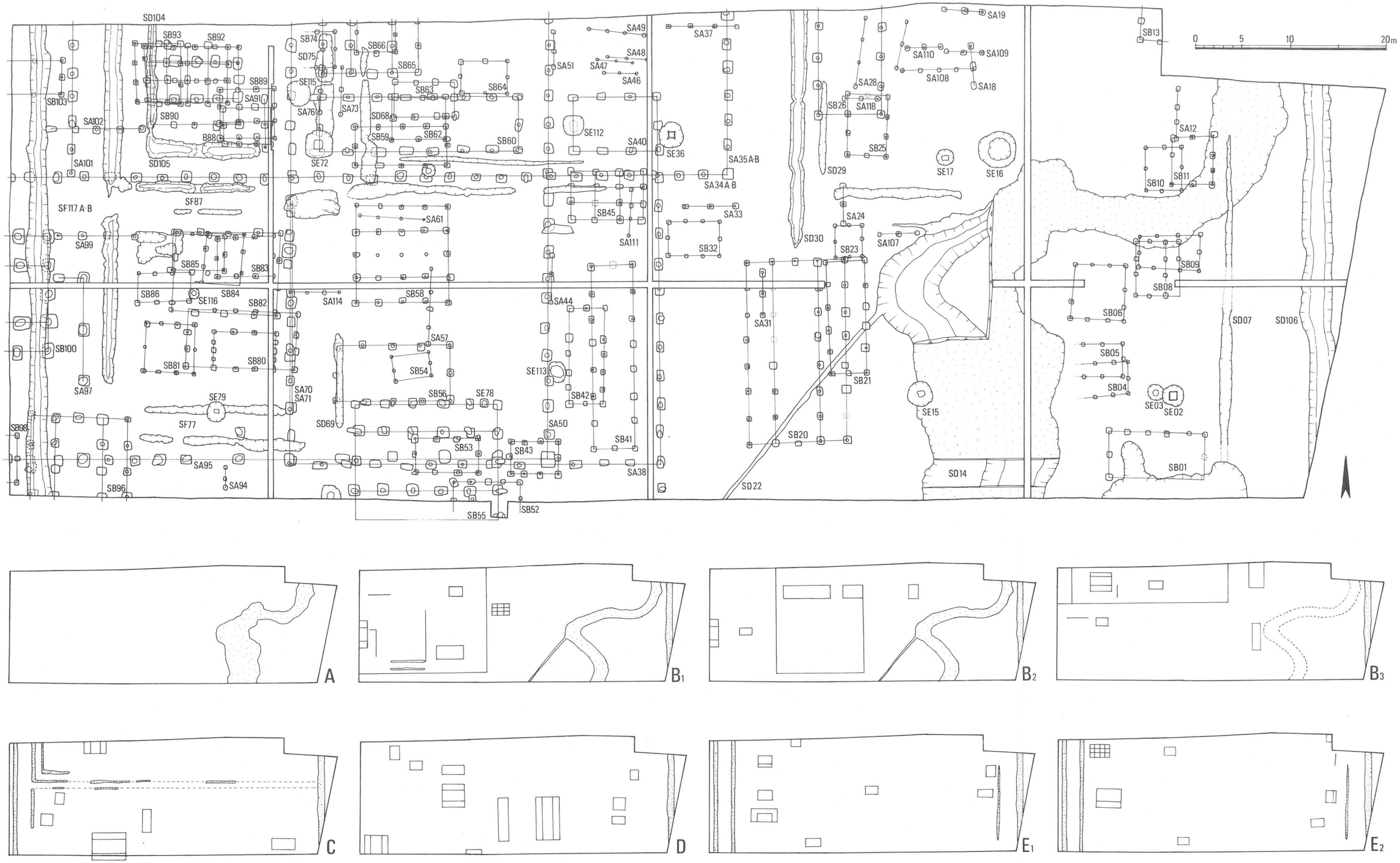
各時期の年代　上記の各遺構から出土した遺物については現在整理中であり、B～E期の年代を細かく確定するには至っていないが、大雑把な見通しを述べれば、B_1・B_2期が奈良時代前半、B_3・C期が奈良時代中頃、D期が奈良時代後半、E_1・E_2期が奈良時代末～平安時代初頭であろう。当調査区ではB_3期ないしC期にSD14が埋め立てられている。六坪ではSD14を埋め立てて園池を作っており、その造成時期は、SD14の凹みを埋め立てた整地層から平城宮土器Ⅲの土器や軒瓦6282・6721型式が出土した事を根拠に、天平末年から天平勝宝年間と考えられている。これを参考にB_3・C期を奈良時代中頃と考えた。また、SF117B側溝や遺物包含層出土の土器の年代によって、平安時代初頭に遺構が廃絶することがわかる。

遺　物

古墳時代の遺物として、菰川旧河川の堆積土から出土した土師器・須恵器がある。奈良時代の遺物は、木簡、土器・土製品、木製品、金属製品、瓦塼類などがある。なお、当調査区内でなされた過去の調査の主要出土品も合わせ紹介する。

木簡　菰川旧河川・SD14・坊間路西側溝から出土した。主要な釈文を掲げる。

1.　・尾張国海部郡嶋里　（菰川旧河川最上層）
　　・□連〔末ヵ〕□□□□□
2.　八田須支九□受〔道ヵ〕□守石村　（SD14、第103－1次）
3.　□□〔人ヵ〕并□〔資ヵ〕人等上日帳　（坊間路西側溝）
4.　正宮四人　内蔵一人　（　〃　）
5.　・人万呂□丸部鯨无一斗　（　〃　）
　　・　十月料
6.　播磨国神前郡陰山郷□□　（　〃　）
7.　厨布直銭二貫□　（　〃　）
8.　名吉魚八隻　（　〃　）
9.　手枕里戸主粮得津君千嶋一石　（　〃　、第118－23次）



第41図　左京三条二坊七坪発掘遺構図・変遷図

土器・土製品　溝・土壙などから一括多量に出土した。硯10個体以上、有孔把手付円面硯、形象硯の可能性がある異形品、水滴、二彩陶器（整地土・第112－3次）、緑釉陶器（SF117側溝・第112－3次）、漆付着土器（SF117側溝・第112－3次、坊間路西側溝・第178次）、土馬、土錘（整地土・第112－3次）などがある。このうち、有孔把手付円面硯は珍らしい物で、類例に福岡県春日市浦ノ原4号窯、静岡県宮原古墳、長野県丸山町長瀬負沢出土品などがある。墨書土器の文字には、「宮」（SD14・第141－35次）、「鯖」（土壙・第178次）、「主水司」「□造少乃古」（坊間路西側溝・第118－23次）、「山部乙万品」「寺」「林」「廣（記号）」「廣□」（坊間路西側溝・第178次）などがある。

木製品　坊間路西側溝から多量に出土し、漆器、木蓋（第118－23次、第178次）、斎串（第118－23次、第178次）、人形・刀形・儀仗用弓・曲物（第118－23次）、鏃形・へら（第178次）がある。SE72からは斎串と曲物柄杓が出土した。**金属製品**　SF117A側溝から和同開珎・銅鈴、SD14埋土から素文小鏡、坊間路西側溝から和同開珎が出土した。

瓦塼類　平城京域としては比較的多く、丸瓦・平瓦のほかに軒丸瓦約60点、軒平瓦約50点、熨斗瓦3点などがある。軒瓦は、奈良時代初頭から後半までの各時期のものがあるが、前半のものが多い。SB55の柱抜き取り痕跡からは6272A・Bの完形品、SA34の柱抜き取り痕跡から6663Cが出土した。

まとめ

今回の調査の主な成果は次の3点に要約できる。①平城京造営当初から二町以上を占める邸宅ないし施設が設けられていたことを確認した。②七坪と二坪とが一体に使われた時期と、道路で区画される時期があることが判明した。この道路が坪境小路であるのか、一つの敷地内を区画する施設であるのか、今後の検討を要する。③二町以上の敷地であった時期の中心的建物群が、七坪の西半部以西で今調査区の北側にあることが推定できた。

5　左京四条二坊一坪の調査　　第174－12次

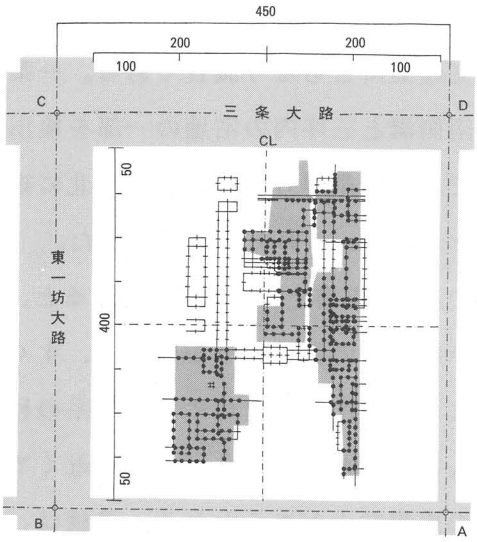
一坪は過去2回、建設に伴う事前調査を実施、塼を多用した八角形の井戸、桁行7間梁行4間の正殿建築などを検出した。今調査区は第2次調査区の東に接し、この時確認した正殿を含む中心部の殿舎配置解明を目的とした。ここでは過去2回の調査成果を含め概略を述べる。奈良時代の遺構には、回廊、柱立柱建物、井戸、塀坪内道路などがあり、初期（Ⅰ）、前半～中葉（Ⅱ）、後半（Ⅲ）に分類できる。

Ⅰ期　桁行規模が5間ないし4間程度の小規模建物がいくつかのグループをなし坪内に分布する。この時期の建物配置は、いわゆる二行八門制を基本としよう。

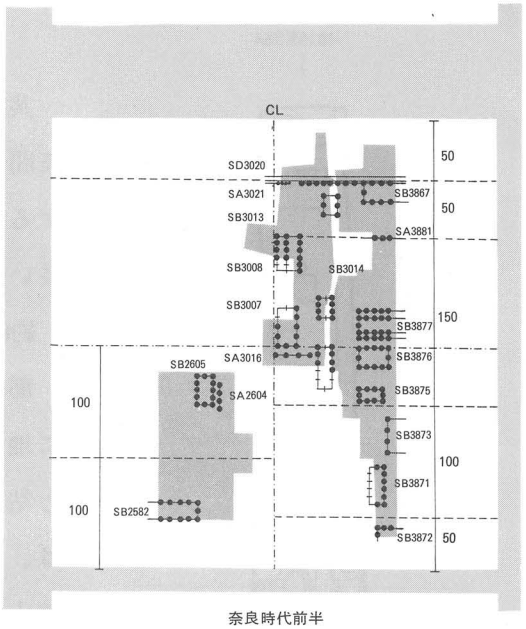
Ⅱ期　Ⅰ期の宅地利用形態は一変し、坪全体を利用する建物配置となる。坪の中央北寄りに、桁行7間梁間4間の正殿が建ち、この東西に南北棟の脇殿と桁行梁間とも2間（？）の建物が建つ。正殿の東西を画す塀は不詳だが、南には東西塀があり、正殿南の未発掘区には門が開いたのであろう。正殿と脇殿はコの字型の配置をとった可能性が大きい。

Ⅲ期　桁行7間梁間4間の正殿を撤去、その位置を踏襲しつつ新たに東西北に廂をもつ三面廂の正殿を営み、この南に前殿を建てる。この2棟は双堂（ならびどう）として機能したのであろう。正殿・前殿の周囲は梁間1間の回廊がめぐる。回廊は1尺＝0.296cmを基準とする天平尺の10.5尺を1間の寸法とし、東西135尺、南北180尺の規模を東西8間（と門）、南北17間に割りつけたようである。なお北面回廊は全面をめぐらず、東西各1間のみである。南面回廊中央の門は、未発掘であり、規模・構造は将来の課題である。回廊の南北二等分点は前殿の棟通りと一致。正殿・前殿の位置から回廊の南北位置と決めたのであろう。なお、施工誤差か、正殿・前殿の東西中軸と回廊の中軸は約0.7mのずれがあり、回廊全体が東に寄る。

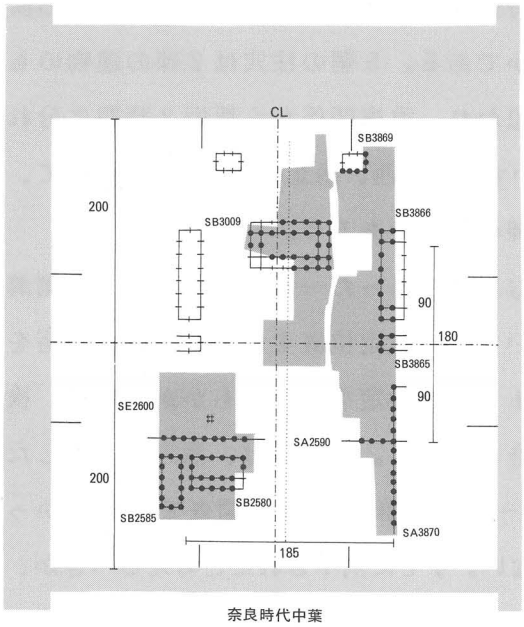
成果と課題　調査の最大の成果は、Ⅱ、Ⅲ期に一坪の中央部にコの字型の殿舎配置を確認したこと。特にⅢ期には回廊を伴う殿舎配置となる。こうした回廊は寺院跡を除けば京内で2例目。宅地の殿舎配置に一形態を加えることになった。Ⅱ・Ⅲ期の継続性とともに発展性を考慮すると、両期の居住者は同一人であろう。



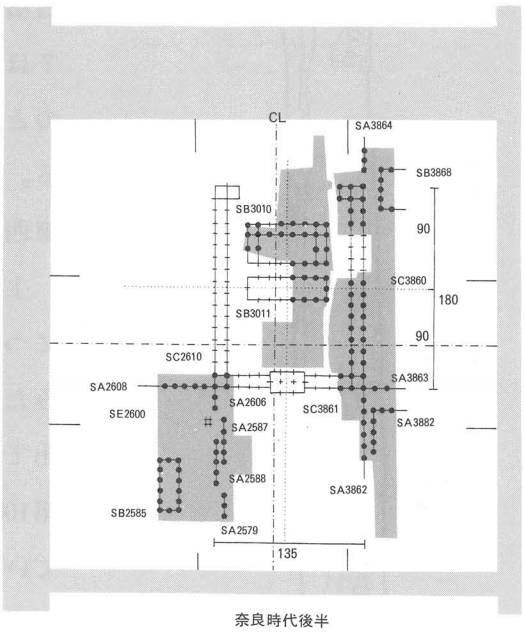
一坪の占地



奈良時代前半



奈良時代中葉

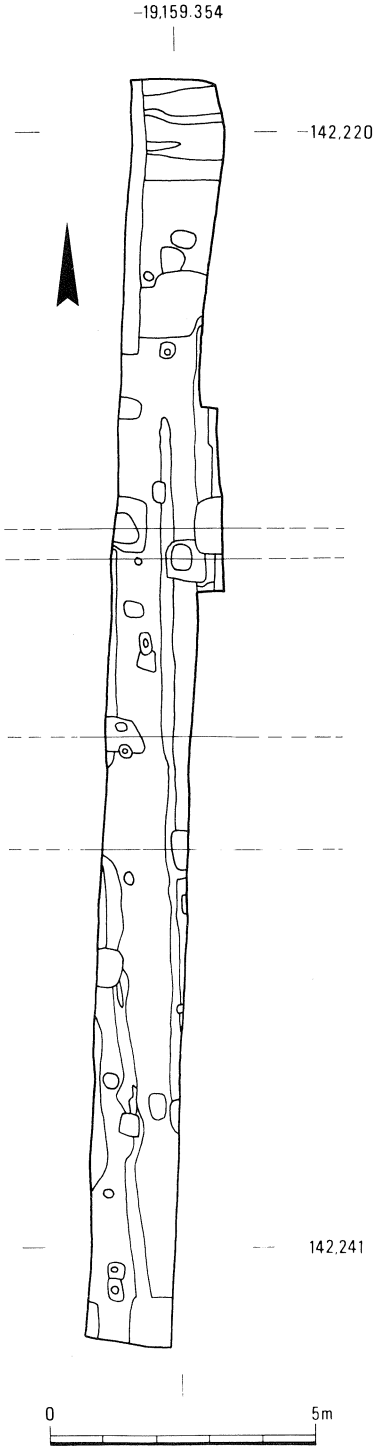


奈良時代後半

図中の数字は、実測値を天平尺
尺＝0.296で除し、近い完数値をとった。

第42図　左京四条二坊一坪の遺構変遷図（１：2000）

6　右京一条二坊三坪の調査　　第174―24次



第43図　右京一条二坊三坪発掘遺構図

共同住宅建築にともなう調査である。一条条間路の南側溝と三坪内の宅地の一部を検出する目的で、現一条通りの南側から南北に細長いトレンチを25mにわたって設定した。

約65cmの盛土と旧耕土、床土を除去すると、一部うすい包含層のある部分をのぞき、すぐに地山となる。地山は、全体に黄灰色系の砂と粘土の入り混った土であるが、北端近くでは、下層の黒褐粘土があらわれる。遺構は、地山面上で検出した。

検出した遺構は、奈良時代の建物の柱穴５、古墳時代土壙１、東西南北に通る耕作用細溝７ほかである。５個の柱穴は２棟の建物のものと思われ、重複関係から新旧２時期に分れる。いずれも東西、南北の柱間間隔からみて、東西棟の一部であろう。

主な目的であった一条条間路とその南側溝については、推定位置を含めて充分の余裕をみたトレンチ設定をしたにもかかわらず、検出できなかった。南側溝は、西方で実施した第106―６次、第141―14次調査でもみつかっていない。すでに削平されたと考えるべきか、あるいは現一条通りの下に想定すべきか決めがたい。古墳時代の土壙は、底に人頭大の石を敷き、土師器小型丸底壷が出土した。

7　右京八条一坊十四坪の調査　　第179次

はじめに

大和郡山市塵芥焼却場建設予定地の事前調査は、これまで大和郡山市教委調査（1984年度、800㎡）や、平城宮跡発掘調査部の第149次調査（1983年度、3,300㎡）、第156—32次調査（1984年度、330㎡）、第168次南・北調査（1985年度、5,600㎡）の計5回にわけて継続的に実施してきた。その結果、条坊の道路遺構や、右京八条一坊十三・十四坪内の宅地割について多くの知見を得るとともに、金属、漆工に関する工房がこの地域に存在したことなどが判明し、京内利用の一端を解明する貴重な成果を得ることができた。今回の調査区は上記の調査区にはさまれた区域で、右京八条一坊十四坪のほぼ中心にあたる。

遺　構

検出した遺構は、奈良時代以前の斜行溝1条、奈良時代の塀5条、建物24棟、溝4条、井戸3基、および炭化物を多く含む土壙群などである。このうち、奈良時代の遺構はおおむね2時期に分けることができ、各時期ごとにさらに時期細分が可能である。

A期　道路遺構SF1650によって十四坪内は東西に二分され、その東半は6間×2間の掘立柱建物（南廂付東西棟）SB1710を中心に建物、倉庫が4時期にわたって建て替られる時期。これらの建物の間をぬうように円形、長円形の土壙や、炭化物を多く含む不整形な土壙が多数存在する。これらの土壙群は、金属製品の製作にかかわる遺構と思われる。なおこの時期の井戸SE1917、1870、1880は金属製品製作に使用されたのであろう。

B期　十四坪内が居住区域として細分される時期。十四坪中心を東西に画する道路遺構SF1650はそのまま踏襲され、区画塀SA1850、SA1900によって一坪

をさらに16分の１に分割している。第168次調査では一坪を32分の１に分割する宅地割が確認されており、同じ坪内でも宅地割に大小のあったことがわかる。

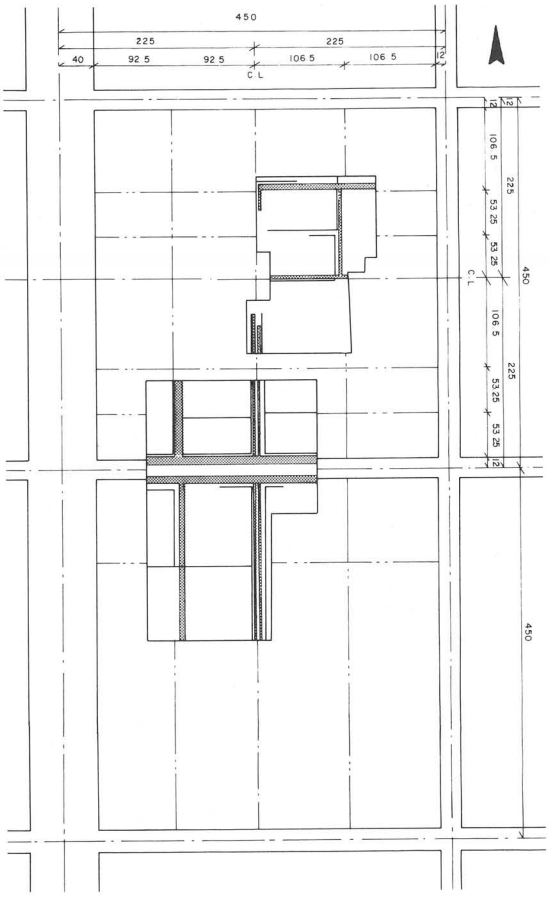
遺　物

遺物で注目されるのは、炭化物を含む土壙からの出土品である。トリベ、フイゴ羽口等の土製品の他、帯金具の未製品、留針など、金属工房関連のものが多い。

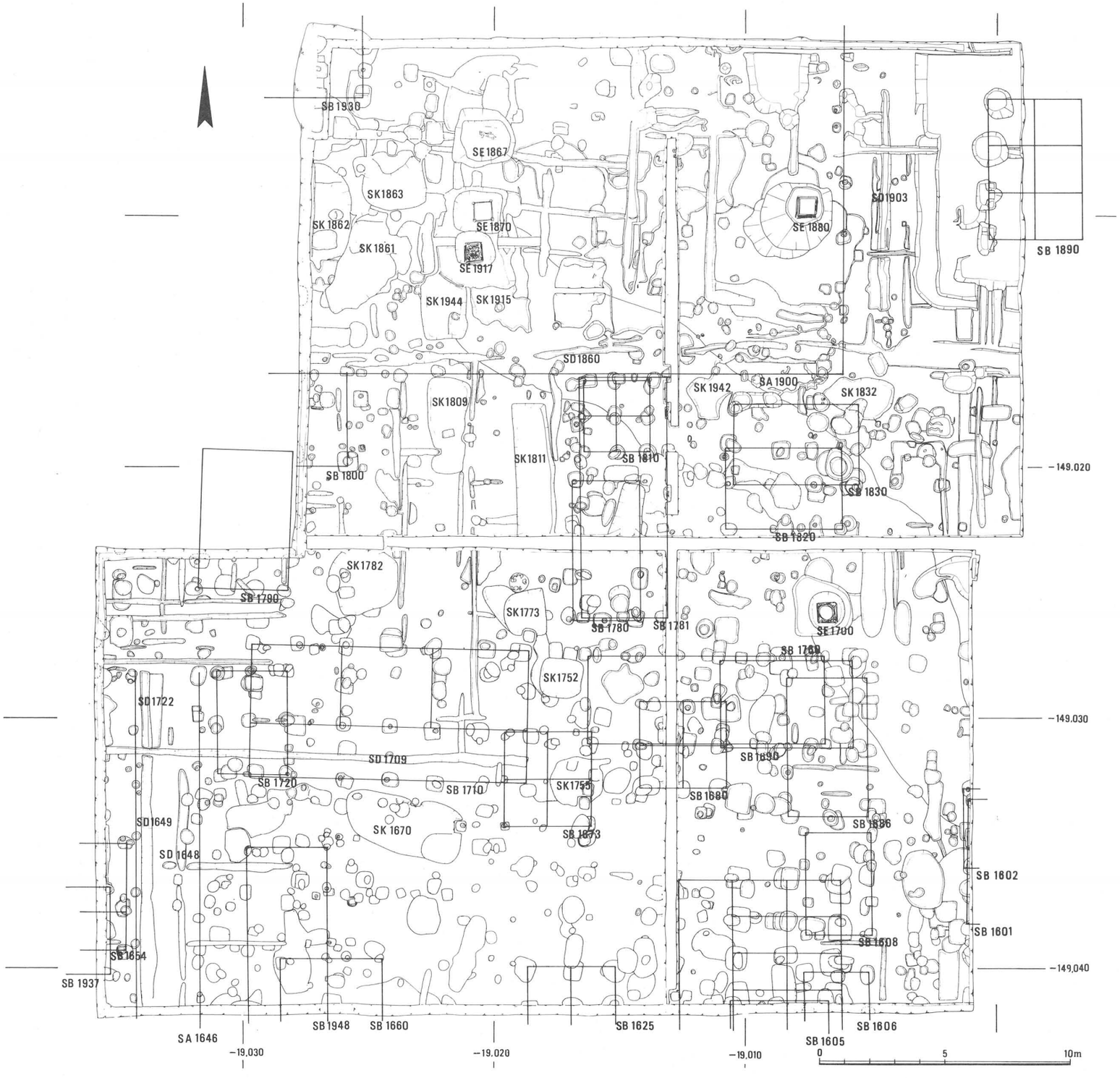
また、SE1880からは平城宮と同笵の軒平瓦が４点、および木簡１点（「秦五□□米一斗　十一月十七日□」）が出土している。

まとめ

今回の調査の結果と、これまでの調査成果とを総合的に検討すると、十四坪の北４分の３の区域と、南４分の１を含めた十三坪の区域とは遺構の様相が異なっていることが明らかとなった。北側は炭化物を含む土壙群をともなう建物を中心に倉庫などがあり、南側は小規模な宅地内に規格性の高い建物が配置される区画である。すなわち、十四坪の中では北４分の３が金属製品を製作する工房、南側が居住区域という坪内での使い分けが行われていたとみられる。そして、後にこの居住区域はさらに北へも及び、宅地が細分化されていったと考えられる。



第44図　右京八条一坊十三・十四坪地割模式図（単位は尺）



第45図　右京八条一坊十四坪発掘遺構図（1：200）

8　頭塔の調査　　第181次

はじめに

頭塔の発掘調査は1978年に当研究所が史跡指定地東辺部にＬ字型トレンチを設けて行ったのが最初で、その調査で基壇東辺部の石積と、東面第１段中央石仏の北5.3mの位置に新たに石仏１基を発見している（「奈文研年報1979」）。今回の調査は奈良県が行う史跡頭塔の復原整備事業に先立つもので、頭塔の本来の規模・構造等を確認することを目的として行った。発掘区は前回の調査区を含む頭塔の東北４分の１（約300㎡）の範囲である。

遺　構

調査前の現状は一辺約30m、高さ約９mの四角錐形の土壇をなし、また、四面には４段にわたって計13体の石仏が露出していた。調査はまず斜面上に生えた木々のうち大きなものを残して他を伐採することから始まり、ついで発掘前の写真撮影、平板による現況地形測量（縮尺１／100）、地下に埋っている石組遺構、ピット、金属の有無等を把握するための電気探査・電磁誘導探査（金属探査）を行った。

＜電気探査・電磁誘導探査の結果＞　電気探査は地中に電流を通し、地下の電気比抵抗を測定することにより、地中の状態を推定する方法である。頂上の平坦部には30cmメッシュ、斜面部には１mメッシュのグリッドを組み、各グリッド交点間の電気比抵抗を測定した。その結果、頂上平坦部の中央に現存する近世の五輪塔の周辺に３ケ所の比抵抗の大きい地点があり、石組もしくはピットの存在が推定できた。このうち、五輪塔の東方の地点では別に行った電磁誘導探査でも金属の存在を示す顕著な反応があり、この地点が今回の発掘区内にかかることから大きな期待をもって発掘を進めたが、結果的にはコンクリートを用いた現代の土壙がその正体であった。一方、斜面部は前述のとおり１m間隔に測定点を設けて探査したが、１m間隔では、後の発掘結果が示す７段に積まれた石積等の遺構に押えることができず、斜面部の探査もさらに小さなグリッドを組む必要があることが判明した。

以上のような発掘前の予備調査の後、表土とその下の黄褐土（遺物包含層）をとり除き、石積を露出させる作業を行った。その結果、基壇上に７段の階段状に積まれた石積と、新たに５体の石仏を発見した。以下、今回の調査で確認した遺構を、基壇・７段の石積・石仏に分けて、その概要を述べる。

基壇　基壇は地山上に積まれた一層の厚さ10～30cmの粗い互層状の盛土からなり、高さは基壇端で0.7～1.2mである。また、本来基壇外縁部は石積、その外周は玉石敷で化粧されていたものと考えられるが、石積・石敷とも基壇東辺に部分的に残るにすぎない。石積は東辺中央から北へ６m分、石敷もこれに沿う幅１m分を確認した。残存する石積は径30～60m大の自然石を２～３段に積み上げたもので高さ70cmであるが、基壇上面とのとりつきから、ほぼ旧規を保つものと考えられる。石敷は、径10～30cm大の自然石を敷きつめているが、やや上面が不揃であり、かつ裏込土がやわらかく、他と異なることから、当初の石敷ではない可能性がある。基壇北辺は石積自体は残らないものの、基壇盛土の裾が東西に直線的に残ること、また盛土裾部に石積みの裏込めに入れたと思われる石が横に並ぶことなどから、本来の基壇端を推定できる。基壇一辺の大きさを東・北面の中央石仏から得られる想定中軸線をもとに復原すると、東辺30.9m、北辺32.8mの規模となる。この差は基壇上面の幅が東辺約４m、北辺約３mと東に比べ北が約１m狭いことから生じている。

基壇上面は３期の変遷がある。当初は基壇上の第１段石積の裾を巡る幅0.5mの犬走り状の玉石敷と、その外周に１段低く敷かれた幅0.2mの礫敷があり、残る部分は盛土のままである。第Ⅱ期は当初の犬走り状石敷を埋め、その上に同じく第１段石積の裾に沿う石敷を部分的に行い、残る基壇上面全体は径３cm前後の礫敷となる。そして第Ⅲ期には、さらにこの礫敷を覆う版築状のたたきが基壇上面を形成する。ここで問題なのは、第Ⅰ期の玉石敷と第Ⅱ期の玉石敷、礫敷がいずれも第１段石積の下に入り込んでおり、現存する第１段石積が第Ⅲ期の基壇上面に伴うということである。今回の調査では石積を残すために、石積自体を断ち割る調査は行わなかったが、おそらく、この第１段石積は改修後のもので、当初の石積はこれよりひとまわり小さかった可能性が高い。

7段の石積　基壇上には7段の石積が階段状に積まれ、塔の本位を形成する。基壇同様すべて盛土からなり、かつ、盛土中には瓦の破片が含まれる。石積を下

第46図　頭塔発掘遺構図（上）・発掘区西壁断面図（下）（1：400）

から順に第１・第２……第７段と呼ぶ。このうち第１・３・５・７段の奇数段に石仏が配され、２・４・６の偶数段には石仏がない。石積は基壇石積と同様径0.3～1.0mの自然石をほぼ垂直に積み上げているが、全体に残りは悪く、第１段が２～３石分、高さ0.7m程を残すのみで、第２段以上の石積では最下段の１～２石が残るにすぎない。各段上のテラスにも玉石が敷かれているが、頂上部には石敷がない。各段の一辺のおおよその大きさは、下から24.9、22.9、19.4、16.5、12.9、10.1、6.7mである。各段上のテラスの幅は同じく下から1.0、1.75、1.45、1.8、1.4、1.7mとなり、やや幅の狭いテラスと、広いテラスが交互に現われる。つまり、石仏上のテラスが狭く、石仏前面のテラスがこれよりも広い。一方、遺物の項にあるように石積を覆う堆積土中には大量の瓦が含まれていた。軒瓦も数多く、しかも大半が東大寺式である。これらの瓦が段上に用いられていたことは確実であるが、どこに、どのように使われていたかを遺構として確認することはできなかった。しかし、瓦の出土量と、テラスの広狭から、この狭いテラスの上に瓦が葺かれていた可能性が高いと考えている。

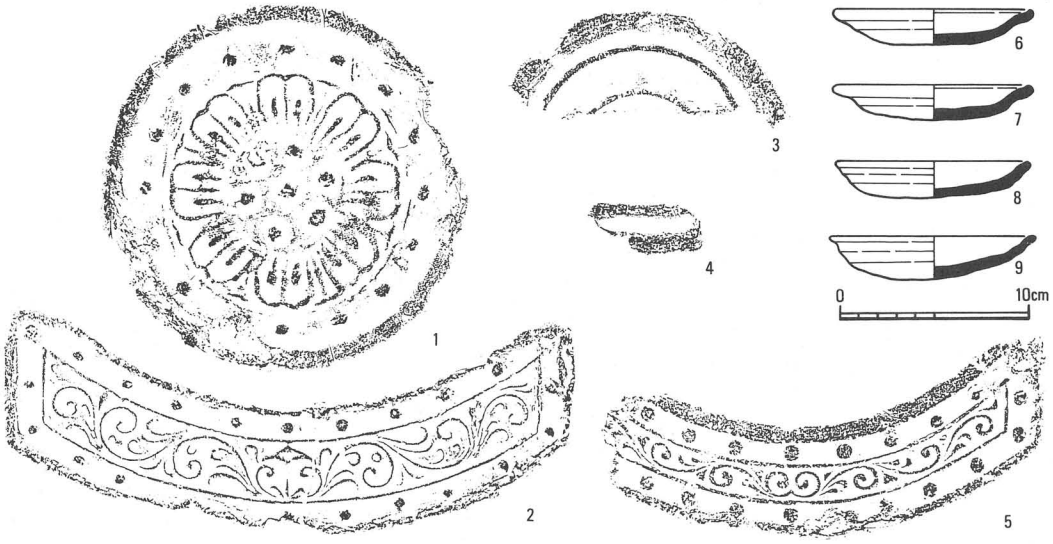
石仏　今回新たに発見した石仏は東面３体、北面２体の計５体である。これまでに確認されていた14体と合わせると、頭塔に計19体の石仏が確認されたことになる。石仏は各段の石積前面より40cm程奥に立てられ、両脇に袖石をおき、全体で仏龕の形をなす。石仏の配置は第46図のごとくになり、このうちＡ・Ｂ・Ｃの３体は中心部から放射状にのびる軸線上に位置し、従来の推定を裏づけたが、北面ではＥ・Ｄの延長上に石仏がなく、東面とは異った配置を示す。また、東面第１段にはＡと中央石仏の中間にも昭和53年の調査で確認した石仏があり、左右対称とすると５体の石仏が配されていたことになる。この中間の石仏の北面での相当位置には現在大きなアラカシがあり、石仏の有無を確認できなかった。東面中軸上の×印の２箇所の石仏は盗掘もしくは土取りによって失われていたが、本来は存在したものと思われる。今回発見の５体の石仏の彫刻はＢ・Ｃ・Ｅの３体はいずれも浮き彫りであり、保存状態もよく明確であるが、Ａ・Ｄの２体は線彫風であり、また風化も進み、何を表わしたものか不明である。

出土遺物

主な出土遺物は、瓦と土器である。瓦は、多量の丸瓦と平瓦に加え、かなりの軒瓦がある。ほとんどが包含層から出土し、基壇上には多量に堆積していたが、仏龕の周囲に集中することはない。軒瓦は、奈良時代117点、平安時代３点、中近世26点、の合計146点が出土した。奈良時代の軒瓦は、115点が東大寺式軒瓦（軒丸瓦6235型式Ｍ種（第47図１）57点、軒平瓦6732型式Ｆ種（２）58点）、重圏文軒丸瓦・軒平瓦各１点（３・４）である。平安時代の軒平瓦（５）は荒池瓦窯と同笵。その他、面戸瓦がある。

土器は、土師器、須恵器、青磁、白磁などがある。平安時代後期から鎌倉時代初め頃（12世紀から13世紀前半）のものが最も多く、新発見の石仏龕内には、供献された状態で土師器皿が残っていた。東面第三段北側の石仏のもの（６～９）が13世紀初め頃、北面第三段東側と北面第五段東側の石仏のものが、12世紀代である。いずれも、火をともした痕跡を残す。奈良時代の土器はごく少量ではあるが、基壇の盛土のなかから奈良時代後半の土師器が出土している。

造営当初の軒瓦がすべて東大寺式であることは、東大寺の僧実忠が造立した土塔が、この頭塔である、というこれまでの研究成果を裏付けるものである。



第47図　頭塔出土瓦・土器（１：４）